

第4章 原因節の焦点化における両言語の異同

第2章と第3章では、日中両言語における因果関係を表す接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性、接続表現の機能性および使用範囲について広く検討を行い、それぞれの面で両者の類似性と相違性を明らかにした。これまでの分析では因果関係を表す接続表現について広範囲に論じ、全体像をほぼつかんだが、細部にある潜在的な類似と相違をまだ明らかにしていない。したがって、本章から第6章までは、いくつかの細部に着眼し論述する。

本章では、原因節の焦点化における両言語の表現形式および焦点マーカ―の位置の類似性と相違性について、統語的な観点から論じたい。

原因節を焦点化する場合、日本語は形態を重視する言語であるため、一般的には構文形式によって表現されるが、中国語は形態的標識に乏しい言語であり、語彙によって表現されるのが一般的である。しかし構文形式によって原因が焦点化されることも少なくないようである。また、日本語は構文形式によって原因が焦点化されるため、焦点マーカ―の位置が固定されているのに対して、中国語は語彙によるものと構文形式によるものの何れもあるため、焦点マーカ―の位置が固定されていない場合と、固定されている場合の何れもあると想定される。両言語の原因節の焦点化について検討する前に、まず、焦点の定義、分類、表現形式について述べておきたい。

4.1 焦点の定義¹⁾

焦点に関しては、様々に定義されているため、一言で焦点の定義をすることは非常に難しい。

Halliday (1967) は、「焦点は新情報を反映する」と主張している。Rooth (1985) は「焦点があれば、必ず選択がある。ひとつを選択し、他を排除した場合は焦点となる」と述べている。田窪(1987)では、焦点の位置について、「文は、前提部分(旧情報)と焦点部分(新情報)とに大きくわけることができることは、よく知られている」と言及している。この論文においては、田窪は焦点の定義について詳しく述べていないが、焦点は新情報であることを主張している。また、今尾(1991)では、焦点が「最も重要な情報を担う要素」と規定している。野田(1997)ではスコープの「の(だ)」について論じる際に、「否定のス

コープ」と「否定のフォーカス」を取り上げ、検討を行っている。野田は「否定などの作用が及ぶ範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカス」としている。野田（1997）では主に否定文を中心に記述しているが、肯定の平叙文や質問文の場合も同様であることを指摘している。

一方、中国語では、焦点についての考えは様々であるが、焦点は新情報であり、排他的であるというような解釈が一般的である。

本章では、先行研究を踏まえ、焦点について、次のいずれかに該当するものとして定義する。

- ① 新情報であるもの
- ② 排他的であるもの
- ③ 文中で、ある作用を集中的に受ける部分（際立てられた部分）、あるいは最も重要な情報を担う要素であるもの

4.2 焦点の分類および表現形式

4.2.1 焦点の分類²⁾

焦点は「無標焦点」と「有標焦点」の2種類に分けられる。「無標焦点」は文中における際立てられた部分ではなく、新情報になっているもののことを指している。因果関係を表す複文においては、「無標焦点」になるのは、主節に限られている。この種の焦点は、何らかの作用を集中的に受けて際立っている部分ではなく、自然に焦点が置かれていることが特徴であるため、「自然焦点」³⁾とも呼ばれている。たとえば、

- (1) こんどは烈しくつき当たったので、杏子は二三歩よろめいた。 『あ』
(原) 这回撞得很猛，(翻) 杏子趑趄了两三步。 《情》
(注：波線は焦点を示す。)

(1)の原文には焦点を提示するマーカーが使用されていないが、情報性としては、原因節より、結果節の方が新しいということが当然であろう。したがって、この文の情報は「旧→新」という順序になっており、焦点が自然に主節に当てられているということになる。

この種の焦点は極めて多く見られるものであるが、普通の表現方法であり、「有標焦点」とは異なっている。

「有標焦点」は、文中で、ある部分が何らかの作用を受けて、焦点が主節から従属節に移されているものである。因果関係を表す複文においては、このような作用を受けるのは原因節に限られている。

- (2) 「自分の頭だから、どうだって宜んだわ」 『吾』
“正因为我是我自己的脑袋，秃不秃都无所谓嘛。” 《我②》
- (3) 「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。」 『吾』
“正因为你不是密探，我才说你坦率得招人喜欢。” 《我①》
- (注：波線は焦点を示す。二重下線は焦点のマーカ―を示す。)

(2)(3)は原文の文末に「のだ」が用いられることによって、焦点が主節から外され、従属節に移され、原因節が焦点化されたことになっている。(2)(3)の原因節の焦点化は、文末の「のだ」と共起することによって生み出されたものであるため、「有標焦点」となる。

4.2.2 焦点の表現形式

表現形式に関しては、主に以下の3種類に分けられる。

① 音声によるもの

会話の中で、焦点をストレス、イントネーションによって、表現する方法である。同じ会話でも、ストレスやイントネーションが異なれば、焦点の位置も異なってくる。

② 語彙によるもの

焦点が語彙によって際立たせられた表現方法である。中国語で多く使用されている。中国語の焦点マーカ―の“正”と“才”⁴⁾がそれである。

③ 構文手段によるもの

構文形式によって焦点を表す方法である。日本語にも中国語にも使用される。たとえば、日本語の「～から(ので・て・ため)～のだ」構文と中国語の“是…的”構文がそれである。また、構文順序による表現形式、いわゆる倒置文もその一種である。たとえば、

「のは…から（ため）である」と中国語の“之所以…是因为”といった構文がそれである。

本章においては、両言語の因果関係を表す原因節の焦点化について検討するため、上記の②と③を中心として研究を進める。

4.3 原因節焦点化の表現形式

4.3.1 日本語における原因節焦点化の表現形式

日本語では焦点化の表現形式は「から・ので、て、ため（に）…のだ」という構文形式による原因節の焦点化と、「のは…（から・ため）だ」という原因・結果節の構文順序を変えることによる原因節の焦点化の2種類が見られる。たとえば、

(4) 大地震が起こった（から・ので、て、ために）、新幹線が止まったのだ。（自作）

(5) 彼と結婚したのは、彼を愛している（から・ため）である。（自作）

(4)の原因節は焦点化されているものである。(4)は文末に「のだ」を付けることによって、焦点を原因節にシフトさせる用法である。(5)は構文順序を変えることによって、「から」節はそれ自体に焦点が置かれることになっている。日本語の因果関係を表す複文における焦点化は、焦点化が可能になるものと焦点化が不可能になるものの両種あるといわれている。この点について、今尾（1991）⁵⁾では、「から・ので・ため」を含む節が焦点化できるかどうかに関して、いくつかのテストを行い、以下のように結論付けている。

から：主観性・客観性の基準からは中立的で、焦点要素に後続しやすい接続形式である。

ので：擬似客観的接続機能を有し、焦点要素に後続しにくい接続形式である。

ため：客観的接続機能を有し、焦点要素に後続しやすい接続形式である。ただし、「タメニ」は専ら焦点要素にのみ接続する。

また、益岡（1997）⁶⁾においても、文末の「のだ」と共起する「から・ので・ため（に）」

節が焦点化されているか否かについて、検討が行われている。結論として、今尾の見解に同意し、「から」節は焦点化できるが、「ので」節は焦点化できないとしている。また、「ため」節は焦点化できるが、格成分の「に」が使用され、「ために」である場合に限ると主張している。益岡は文末の「のだ」と共起している「から・ので・ため(に)」の原因節が焦点化されたかどうかについて確かめる方法として、これらが擬似分裂文の焦点位置に移動できるか否かというテストを提案している。たとえば、(4) の場合は、「ので」も使用できるが、「ので」節が焦点化されているかどうかについては、以下のように構文順序を変えて検証してみると、明らかになる。

(4') 新幹線が止まったのは、大地震が起こったから(ため)である。

(4'')* 新幹線が止まったのは、大地震が起こったのでである。

「から・ために」節は文末焦点位置に移動できるが、「ので」はそれが不可能である。「ので」節が焦点化できないのは、文末焦点位置に移動できないからである。つまり、焦点化できる原因節は、文末焦点位置に移動できるものでなければならないということになる。

しかし、蓮沼(2001)⁷⁾では、原因に焦点を当てて推量する場合、「て」よりは「から・ので」のほうが多く使われることについて指摘している。つまり、蓮沼は「ので」節と「て」節にも焦点を当てる用法があるということを認めている。蓮沼(2001)では、以下のような例を挙げている。

(6)	夜半に雨が降っ	テ	}	涼しくなったノダロウ (原因Xが推量の焦点)
	夜半に雨が降った	カラ・ノデ		

また、于(2000)⁸⁾では、「ので」と「から」の焦点の当て方について、『ノデ』文に焦点が置かれる場合、理由の従属節に表現の焦点が置かれることはなく、基本的には帰結として導き出される主節に置かれることになる。例：頭が痛いので、[会社を休んだ。] (中略) もし、従属節に焦点を置きたければ、主節に『ノダ』を付けて、スコープを文全体に広げる必要がある。」と述べている。また、「から」の焦点の当て方についても、同様に述べている。

このように、いままでの因果関係を表す複文における原因節の焦点化に関する論述は様々だとわかる。したがって、本研究においては、データ上の傾向を考慮し先行研究を踏まえて、原因節の焦点化可能の表現を以下のように規定する。

- ① 主節に「のだ」を付けたもの ⇒ P (から／ので／ために／て), Q + のだ
 ② 構文の順序によるもの ⇒ Q + のは, P (から／ため) だ

4.3.2 中国語における原因節焦点化の表現形式

中国語においては、原因節焦点化の表現形式は、構文手段によるものと語彙によるものの2種類に分けられる。例としては、以下のようなものが挙げられる。

- [7] (因) 正因为我是大山的儿子, (结) 我才痴迷大山, 痴迷森林。 《当》
 私は山の息子だからこそ、山におぼれ、森林におぼれたのだ。 (拙訳)
- [8] (因) 正因为管蔡看出他的意图, (结) 所以他才把管蔡杀了灭口。 《读》
 管蔡は彼の意図を見破ったから、彼が管蔡を殺して口止めをしたのだ。 (拙訳)
- [9] (因) 就是因为没带钥匙, (结) 她才在外面过夜的。 《读》
 鍵を持っていなかったから、外で泊まったのだ。 (拙訳)
- [10] (结) 我之所以捐款救助失学孩子, (因) 是因为我是一名教师也是一个母亲。 《当》
 学校に行くチャンスを失った子供達を援助するのは、わたしが教師であり、母でもあるからである。 (拙訳)
- [11] (结) 我国钢材之所以进口, (因) 很大程度上正是由于国内钢材从品种、水平上尚满足不了轿车工业发展的需求。 《当》
 我が国が鋼材を輸入するのは、国内鋼材が種類と水準という面でまだ自動車工業の需要を満たせないためである。 (拙訳)

[7][8] の“因为”節は語彙により焦点化されたものである。従属節と主節にはそれぞれ“正、才”といった原因節を際立たせるマーカーが用いられている。原因節の前に立つ“正”は直接原因節に作用を与えているが、主節に位置する“才”は、間接的に作用をしているように思われる。[9] の“因为”節も焦点化され、焦点マーカーがやや複雑である。

一文の中で、語彙によるものと構文手段によるものの2種類が含まれている。原因節にある“是”は文末の“的”と呼応し、“是…的”⁹⁾という構文形式になっており、中国語では代表的な焦点マーカーとされている。また、原因節の前頭に立つ副詞の“就”は原因節を際立たせる作用をしており、焦点マーカーだと認めるべきだろう。このように、一文の中で、構文形式による焦点マーカーの“是…的”と語彙による焦点マーカーの“就、才”がともに使用されていることがわかる。[10] [11]は構文順序による“因为”節と“由于”節が焦点化されたものである。日本語と同様に、順序を変えることによって、原因節それ自身に焦点が置かれることになっている。上掲の[7] [8] [9]の原因節が実際に焦点化されたか否かについては、文末焦点位置に移動できるかどうかというテストをしてみると、原因節が何れも文末焦点位置に移動できるということがわかる。

[6'] (結)我之所以迷恋大山，痴迷森林，(因)正(是) 因为我是大山的儿子。

山におぼれ、森林におぼれたのは、私は山の息子だからである。

[7'] (結)他之所以把管蔡杀了灭口，(因)正(是) 因为管蔡看出了他的意图。

彼が管蔡を殺して口止めをしたのは、管蔡は彼の意図を見破ったからである。

[8'] (結)她之所以在外面过夜，(因)就是 因为她没带钥匙。

外で泊まったのは、鍵を持っていなかったからである。

中国語の因果関係を表す複文においては、“因为”と“由于”が原因・理由を表す代表的な表現として使用されており、“因为”を用いる原因節と、“由于”を用いる原因節のいずれも焦点化できる。上掲用例の“因为”文は何れも“由于”と互換できる。勿論“由于”文も“因为”文に置き換えられる。つまり、両者は使用上境界線がはっきりしておらず、機能的にはほぼ重なっているということである。なお、“由于”は常に書面語として使われているが、“因为”は書面語だけではなく、口語にも多く使用されている。上述によると、中国語の焦点化可能の表現は次のようになるであろう。

- ① 従属節の先頭または主節に焦点マーカーが来る場合

例： (正/就) + 是 + (因为/由于) P, (所以)才Q + (的)

- ② 構文順序による焦点化

例： 之所以Q, (正/就) + 是 + (因为/由于) P

以上、原因節の焦点化について見てきた。ここまでの記述によって、両言語の原因節における焦点化の表現形式をまとめると、【表 27】のようになる。

【表27】原因節における焦点化の表現形式

表現形式	中国語	日本語	備考
語彙によるもの	○	×	正（是）・就（是）・才など
構文形式	○	○	P（から・ので・て・ために）、Qのだ 是（因为・由于）P…，（才）Q…的
構文順序	○	○	Q, P

【表 27】によると、両者には重なりとずれがともに存在していることがわかる。日本語は語彙による原因節焦点化の表現形式を持っていないが、中国語にはそれが存在している。日本語で「から・ため」文の文末に「のだ」を付けることによって原因節を焦点化させるという構文形式があるのに対して、中国語にも構文形式による原因節の焦点化も見られる。構文順序を変えることによって、原因節はそれ自身に焦点が置かれる表現形式は両言語ともにある用法である。

日本語の原因節における焦点化は、文末の「のだ」と大きな関わりがあり、いままで、日本語の「のだ」文と中国語の“是…的”構文との対応性について研究されたものがいくつか見られるが、原因節を焦点化させるマーカーとしての対応の実態に関する研究はほとんどなされていないようである。中国語の原因節の焦点化は、語彙による表現方法があるため、「のだ」文が中国語に翻訳される際に、必ずしも“是…的”構文と対応するとは限らないことも考えられる。また、両言語の原因節における焦点化は、焦点の位置は大きく重なっているが、焦点マーカーの位置が異なっている場合が多いということも想定できる。両言語の原因節における焦点化はどのような類似点を持つか、またどのような相違点が見られるかを明確にするため、以下、日中対訳上で見られた傾向をまとめ、実例を通して、検討を試みる。分析に当たって、両者の焦点と焦点マーカーの位置に注目して対照分析を進める。

4.4 原因節の焦点化における日中両語の対応性

「のだ」が日本語の原因節の焦点化と大きな関わりがあるということに関しては、4.2で既に述べた。両言語の原因節における焦点化の対応実態を考察するに当たって、まず、

「から・ので・て・ために…のだ」構文と中国語の対応性について観察してみる。そして、構文順序による焦点化の対応性についても検討を行う。

4.4.1 主節の「のだ」による原因節焦点化の場合

主節に「のだ」を付けて、従属節に焦点を当てる場合は、「Pから、Qのだ」「Pため、Qのだ」「Pので、Qのだ」「Pて、Qのだ」といった構文形式がある。翻訳上、中国語との対応関係には明らかな傾向が見られる。訳文には訳者の主観的な要素も含まれていることは否めないが、主節に「のだ」を付けて、焦点が従属節に移される文が中国語に訳される場合、焦点を提示するマーカーが使用される傾向が極めて強い。勿論例外もあるが、少数である。ただし、中国語では焦点の表現形式は日本語と異なり、語彙による焦点の提示手法がもっとも多く使用される。その形式は、主節に焦点のマーカーが置かれるもの、従属節に焦点のマーカーが置かれるもの、従属節と主節ともに焦点のマーカーが置かれるものの3つがある。

- | | |
|--|------|
| (12) 「…これ友だちだから頼むのよ。…」 | 『吾』 |
| “… <small>(四)</small> 我们是朋友， <small>(結)</small> 所以才求你。…” | 《我②》 |
| (13) 「…お前が承知しないもんだから、あいつはやけくそになったんだ」 | 『青』 |
| “… <small>(四)</small> 你不答应他， <small>(結)</small> 他才豁出去了。” | 《青》 |
| (14) 「あなたはここの冬を知らないからそう言うのよ」 | 『ノル』 |
| “ <small>(四)</small> 你不知道这里的冬天， <small>(結)</small> 才这样说。” | 《挪》 |
| (15) 「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。」 | 『坊』 |
| “ <small>(四)</small> 你们这两个家伙都是奸狡货， <small>(結)</small> 所以我们才这样代天行诛的。” | 《哥》 |
| (16) 「うちへ寄っていただくと思っで、走って来たんですわ。」 | 『雪』 |
| “ <small>(四)</small> 想请你到我家来坐坐， <small>(結)</small> 才跑过来的” | 《雪①》 |

(12)(14)では、原文の主節の文末に「のよ」が用いられているが、実際に文中での働きは「のだ」と同様であり、「のよ」を「のです(よ)」に変えても差し支えない。日本語では文末に「の(ん)だ」を付ける場合、2種類の解釈が得られる。ひとつ目は従属節に焦点を当てる解釈であり、もうひとつは文全体が「の(ん)だ」の範囲に収められる

という解釈である。たとえば、例(12)「友だちだから頼むのよ」では、[友だちだから頼む]という部分が「のだ」のスコープに収められているが、その中で[友だちだから]という部分が焦点になっている。

一方、訳文においては、いずれも焦点を提示する機能を持つ“才”が主節に使用されている。中国語では“才”は焦点を表す表現として多く用いられており、因果関係を表す複文では、“才”は文に内在する原因・理由の論理関係を際立たせる役割を果たしている。(12)の主節の“求你”の理由はほかにも考えられるが、他の理由より“我们是朋友”が“才”によって取り立てられており、もっとも重要な理由になっている。(13)(14)(15)(16)も同様に解釈できる。上例の原文と訳文の焦点マーカ―はいずれも主節にあり、焦点の位置も一致しており、原因節が焦点化されている。

- (17) 「正直だから、どうしていいか分らないんだ」 『坊』
 “^(因)正因为正直，^(果)所以不知道该怎么办。” 《哥①》
- (18) 「貰うかも知れないから構わないんです」 『吾』
 “^(因)正因为说不定娶不娶，^(果)所以没有关系，” 《我②》
- (19) 規則だけは軍隊と同じで喧しく、国防婦人会の人が手伝いに来るから、患者の家族の看護はいっさいお断りするというのです。 『黒』
 唯独在规章制度上和军队一样，太烦琐啦，^(因)说是因为有国防妇女会的人来帮忙，^(果)所以一概拒绝患者家属的护理。 《黒》

(17)(18)(19)は、主節の文末に「んだ」「んです」「のです」を付けることによって、原因節が焦点化されているが、訳文の主節には、焦点を提示するマーカ―が置かれていない。中国語では語彙によって焦点を示す場合が多く、マーカ―の位置は固定されていない。(17)(18)訳文では、それぞれ従属節にある原因・理由を表す表現の“因为”の前に焦点を提示するマーカ―の“正”が置かれて、際立たせられた要素が唯一の原因・理由だということが含意されるようになっている。(19)の従属節には代表的な焦点のマーカ―の“是”を用いて、焦点を提示している。“是”も“正”も同様な働きを持つものであり、“是/正”を用いることによって、排他的な効果を生み出せる。これらの文の焦点マーカ―の位置は原文と一致していないが、焦点は一致している。

- (20) 「まあそんな最負があるから独仙もあれで立ち行くんだね。」 『吾』
 “噢，正因为有人捧场，独仙才混得下去啊！” 《我①》
- (21) こんな悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。 『坊』
- (21a) 正由于他做起事来这样不死不活的，所以住宿生才敢于捉弄值宿教员。 《哥②》
- (21b) 正因为办事拖拉，所以学生才敢捉弄值班教师。 《哥③》
- (22) 「ただ俺をこき使おうと思って、そら使ってやがるんだ」 『野』
 “他就是为了逼我干活，才装病的。” 《野》
- (23) 浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。 『坊』
- (23a) 浅井の爹是个庄稼人，俺问过清婆：“是不是庄稼人都是这种面色？”清婆告诉俺说：“不是的，他是因为光吃老秧南瓜，所以才又苍白又虚胖的。” 《哥②》
- (23b) 浅井是庄稼人，所以我曾问过阿清婆：“当了庄稼人，是不是就得变成这种脸色？”阿清婆告诉我说：“不是，那是因为他尽吃老秧的南瓜，所以才苍白而肿胖的。” 《哥③》
- (24) 「判りません。相手の人の気持は一。でも、そんなことはどうでもいいんです。ただ自分が苦しいので、自分がどうしたらいいか、それを教えていただきたいんです」 『あ』
 “不知道。那个人的心思……不过，他怎么想都无所谓。只是我自己很痛苦，所以才请您指点的。” 《情》

(20)～(24)の原文は、文末に「んだ」「んです」を付けることによって、原因節が焦点化されている。それらに対応している中国語訳文では、焦点のマーカーは複数になっている。(20)(21a)(21b)の焦点マーカーは何れも2箇所置かれており、原因節の前頭に立つ原因節を際立たせる機能を持つ“正”と、主節に位置する原因節を取り立てる機能を持つ“才”を呼応させるといった表現形式であるのに対して、(22)(23a)(23b)(24)は原因節に位置する焦点マーカーの“就是/是/只是”と文末に位置する焦点マーカーの“的”と共起して、“是……的”構文形式になっている。さらに、主節に取り立て機能を持つ“才”も使用されており、これらの文ではそれぞれ焦点マーカーが3箇所置かれている。つまり、一文の中で、“是……的”構文形式による原因節の焦点化と、語彙による原因節の焦点化の2種類表現形式が含まれている。“是……的”という構文形式に関しては、袁(2003)10)

は「“是……的”構文形式は場合によって、広焦点 (broad focus) を表すことができる。すなわち、“是……的”構文内に含まれた出来事がすべて焦点となる。」と述べている。さらに、「“是……的”構文の中で述べていることは、すべて新情報になっており、一種の「文焦点」である」とも述べられている。袁によると、(22) (23a) (23b) (24) の焦点は広焦点であり、焦点の範囲はそれぞれ次のように拡大される。

玉枝一定是【(因为冒着风雪赶路) 而招致胸部得病】的。	⇒ 是 + G + P, G + Q + 的
大概是【(因为在这种过于狭窄的地方没事可干), 作为一种消遣来搞】的吧。	⇒ 是 + G + P, Q + 的
他是【(因为光吃老秧南瓜), 所以才又苍白又虚胖】的。”	⇒ 是 + G + P, G + 才 + Q + 的
那是【(因为他尽吃老秧的南瓜,) , 所以才苍白而胖胖】的。	⇒ 是 + G + P, G + 才 + Q + 的

(□ は由来の焦点を示す) (【】 は拡大された焦点を示す) (G は中国語の接続マーカー (关联词语) を示す)

ただし、このように複文の焦点の範囲を拡大すると、本章で規定した焦点の定義と矛盾する点が生じてくる。袁(2003)は“是……的”という構文内の内容はすべて新情報だと言っているが、(22) (23a) (23b) (24) の用例の内容によれば、主節の情報が新情報ではないことが分かる。袁ではこれを広焦点と呼んでいるが、このような文では、従属節と主節ともに“是……的”の構文範囲に入り、日本語の主節に「のだ」を付ける文とまったく同様な効果を生み出せるので、これはむしろ文のスコープだと考えるべきである。つまり、“是……的”構文にも2つの解釈がありうる。ひとつは、焦点を従属節に当てるという解釈であり、もうひとつは、文全体が“是……的”構文のスコープに埋め込まれるという解釈である。たとえば、[他是{ [因为光吃老秧南瓜], 所以才又苍白又虚胖}的]では、{因为光吃老秧南瓜, 所以才又苍白又虚胖}という部分がスコープであり、[因为光吃老秧南瓜]という部分はその中のフォーカスである。したがって、上記のような“是……的”構文の焦点が拡大される場合、旧情報も含まれているので、広焦点と呼ばずに、スコープと言ったほうが、より適切であろう。

4.4.2 構文の順序による原因節焦点化の場合

日本語でも中国語でも、構文の順序を変え、原因節を焦点化させる用法がある。この種の文の等価性はきわめて高く、日本語の「～のは、～からである」「～のも、～からである」「～のは、～ためである」に対して、中国語では“之所以～, 是因为～”などの構文形式

が多く用いられて、対応する傾向がある。ここでは、原因・理由を表す接続表現の“因为”などの前に置かれている“是”が、この種の文の主な焦点マーカーになっている。

(25) 死の病といわれたのも、貧しい山間部落では治療の方法がなかったからである。『越』
(結) 肺病之所以会被称作绝症，(因) 也是因为穷山村里根本没有治疗的办法。《越》

(26) 二人と一緒にダフネを出たのは、彼等の行先を無性に知りたくなつたからである。
『挽』

(結) 之所以与他们一起走出“达夫妮”，(因) 是因为我非常非常想知道两人去哪里。《挽》

(27) この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。『吾』
(結) 所以强调指出“那一面”，(因) 是因为主人家里除此之外再也没有第二面镜子。《我①》

(28) 庄吉さんがびっこになったのは、舷に足首を打ちつけて骨折させたためである。『黒』
(結) 庄吉之所以弄成了个瘸腿，(因) 那是因为脚脖子磕在船槓上造成了骨折。《黒》

(29) 生気を取戻したのは、軍靴で私の首と肩を踏台にして誰かが動きだしたためである。
『黒』

(結) 我之所以能活过来，(因) 是因为我的脖子和肩膀成了军靴的踏脚石，被人弄醒的。《黒》

(30) ピカドン以後、広島へ来ていた丈夫な者が死ぬようになったのは、ピカドン爆弾に毒瓦斯が仕込まれてあつたためである。『黒』

说原子弹轰炸以后，(結) 到广岛来的健康人之所以会死掉，(因) 就是因为原子弹装有毒气的缘故。《黒》

(25)～(30)の「から」文と「ため」文は「原因・理由 ⇒ 結果・帰結」という構文順序になっており、原因節はそれ自身に焦点が置かれている。因果関係を表す複文では、「原因・理由から結果・帰結を導く」といった構文順序が一般的であるが、原因節を際立たせる効果を出すため、「結果・帰結から原因・理由をたどる」という順序に変える用例もよく見られる。構文順序を変えることによって、焦点を原因節に移動する。これも焦点を提示する一種の手法である。両言語ともに使われる表現形式で、対応関係の傾向が明らかになっている。

4.5 焦点の諸相

ここまで、因果関係を表す複文における原因節が焦点化される両言語の表現形式について考察した上で、それらの対応関係を明確にした。ここで、もう少し範囲を広げて、主節に疑問表現と推量表現が現れ、原因節が疑問のフォーカス、推量のフォーカスとなる場合の両言語の焦点の表現形式がどうなるかについて観察する。

4.5.1 原因節が疑問のフォーカスである場合

日本語の疑問文においては、過去のことについて問う場合に、文末に「のだ」を付けることが求められる。文末の「のだ」を付けることによって、原因節が疑問の焦点となる。

(31) 雨が降ったから、試合を中止しますか。

この文は自然な文であり、違和感を覚えないが、主節を過去にすると、文の自然さが消えてしまう。

(31') * 雨が降ったから、試合を中止しましたか。

(31')は疑問文でなければ、極めて自然な文になるが、過去のことについて問うているため、文末の「のだ」の手助けが必要とされる。

(31'') 雨が降ったから、試合を中止したのですか。

「のだ」を付けると、「試合を中止するか否か」ではなく、「試合を中止することにした」理由が「雨がどうか」を問うている。すなわち、原因節が疑問のフォーカスになっている。一方、中国語にも同様の問題が存在している。同様の条件である場合に、上記の用例をそれぞれ中国語に訳すと、次のようになる。

(31a) 下雨了，中止比赛吗？

(31' a) 下雨了，中止比赛了吗？

(31" a) 是因为下雨了，中止比赛的吗？

中国語も日本語と同様に、過去のある行為の理由について質問しようとする、焦点マーカ―の“是…的”の手助けが必要とされる。(32' a) は文として成立するが、単なる「試合を中止したかどうか」について問うているのみである。「試合を中止したかどうか」ではなく、「試合を中止した原因」について問うているのは、やはり焦点マーカ―の“是…的”が使用されている(32" a) 文である。なお、過去の出来事の発生原因について問う場合、肯定文より焦点マーカ―の使用に拘っている。“是…的”構文形式を用いるか、または従属節にある焦点マーカ―の“是”を省略して、主節に取り立てる機能を持つ“才”と“的”を用いる表現形式であれば、いずれも過去の出来事の発生原因について問うている効果を生み出すことができる。しかし、“的”を省略すると、過去の出来事の発生原因について問うという効果が出せなくなる。

(31" b) 因为下雨了，才中止比赛的吗？

(31" c) 是因为下雨了，才中止比赛的吗？

(31" d) * 是因为下雨了，才中止比赛吗？

(31" b) の従属節にある焦点マーカ―の“是”を省略しても、主節に取り立て機能を持つ“才”を使用することによって、従属節の[下雨了]という状況が主節の[中止比赛]の唯一の理由だということが含意され、原因節が疑問の焦点となる。また“的”¹¹⁾を使用することによって、過去の出来事だということが示される。(31" c) は“是…的”構文形式であるだけでなく、主節に“才”も使用されているので、疑問の焦点は従属節に当たっているのが明らかであり、過去の出来事の発生原因について問うことになっている。

(31" b) と (31" c) のいずれも過去の出来事が生じた原因について問うている自然な文として成立するが、(31" d) は“的”が省略されることによって、過去の出来事の発生原因を問う文として成り立たないばかりでなく、自然さをも失っている。

このように、原因節が疑問のフォーカスになる場合、日本語は文末に「のだ」の手助けが必要とされるのに対して、中国語は“的”の使用が必要とされるということがわかる。

4.5.2 原因節が推量・判断のフォーカスである場合

原因節が推量・判断のフォーカスとなる場合、中国語は焦点を表すマーカの使用が単数であったり、複数であったりするだけではなく、推量・判断を表すマーカの使用も自由である。マーカの数とは関係なく、この種の文においては、両言語の対応性が非常に高い。ここで、中国語の訳文における推量・判断を表すマーカを日本語と同様に、一重下線で示す。

(32) 泥棒の方が虎蔵君より男振りがいい ので、こっちが刑事だと早合点をした のだろう。

『坊』

^(註) 这大概是 因为 窃贼要比那位刑警模样儿长得帅得多，^(註) 所以 主人立即把他错认成是刑警了。

《哥①》

(33) 吹雪の中を歩いた ために、玉枝が胸を痛めた のにちがいないと喜助は思った。『越』

^(註) 玉枝一定是 因为 冒着大风雪赶路 而 招致胸部得病的。

《越》

(34) 竹藪が、この丘陵から町へ下りる斜面をおおい、藪の外れに、一本の遅桜がまだ花を落さずにいた。それは実に遅い花で、吃り吃り咲き出した ために、こんなにも遅れた のではないかと 思われた。

『金』

在竹丛边上有一棵樱花尚未凋谢，这是一株花期较晚的樱树，真是名符其实的晚樱。^(註) 也许它也是 因为 结结巴巴、开不顺利，^(註) 所以才 拖延到现在吧？

《金》

(35) 「大方狭い田舎で退屈だ から、暇潰しにやる仕事なんだろう」。

『坊』

^(註) 大概是 因为 在这种过于狭窄的小地方没事可干，^(註) 作为一种消遣来搞的 吧。

《哥》

(36) 西洋人がやらない から、自分もやらない のだろう。

『吾』

^(註) 大概是 因为 西洋人不这么干，^(註) 你才 不肯的 吧。

《我①》

(37) おそらく、無意識のうちに明りを求め て、つい高いところに足がむいてしまう せいなの だろう。

『砂』

^(註) 恐怕无意识中一直追求着亮光，^(註) 所以才 跑到高处来了 吧。

《砂》

(32) ~ (37) の「から・ので・ために、て」文の主節で「の(ん)だろう」「のにちがいない」「のではないかと」といった推測・判断の表現が用いられることによって、原因節がそれぞれ推測・判断のフォーカスとなっている。

一方、中国語訳文では、いずれも焦点を表すマーカーと推量・判断を表す要素が用いられており、原文との対応性が極めて高いと言える。

この種の文は、従属節と主節の表現内容はいずれも確定した事実であるが、従属節が主節の出来事の発生原因になっているか否かはまだ確定していない。日本語では、主節の出来事の発生原因について推量・判断する場合、推量・判断の役割を担っている表現は文末に置かなくてはならない。一方、それに対応する中国語では、推量・判断の機能を果たしているマーカーは、判断副詞の“大概／也许”などである。原因節が推量のフォーカスとなる場合、これらは原因節の前に置かれなければならない。また、判断副詞の“大概／也许”などが使用された上に、文末に推量の意味合いを含む語気助詞の“吧”もしばしば用いられる。このように、一文の中で推量・判断を表すマーカーは単数で用いられる場合と複数で用いられる場合のいずれもある。

上掲用例では、(32) (33)の文頭にそれぞれ判断副詞の“大概”“一定”が使用され、推量・判断を表すマーカーは単数となっている。(34) (35) (36) (37)では文頭にそれぞれ“也许”“大概”“恐怕”といった推量・判断を表すマーカーが使用された上に、文末にいずれも推量の意味合いを含む“吧”も使用されているので、推量・判断を表すマーカーは複数となっている。

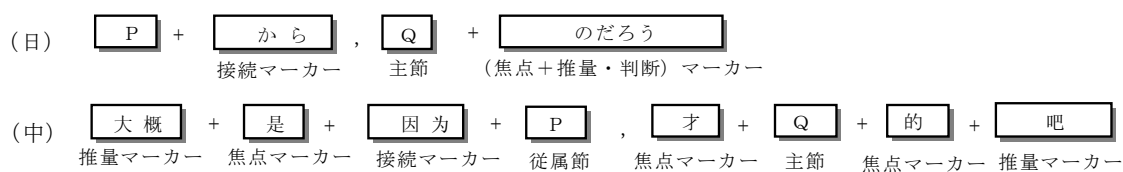
また、焦点を表すマーカーの使用も、一文においては、ひとつのみ置かれる場合と、複数のもが置かれる場合のいずれもある。焦点マーカーの使用は疑問文のような拘りが見られず、極めて自由である。ここで、上例のうち、焦点マーカーがもっとも多く使用され、推量・判断を表すマーカーも複数である(36)の訳文と、その日本語原文について分析してみる。

(36)の原文の文末には、「のだろう」が使用され、従属節が「のだろう」の推測のフォーカスになっている。文末は推測表現であるが、「のだろう」の形式になっているため、従属節と主節の出来事は話者と相手との実際の共有情報になっている。主節の「やらない」ということは当事者の実際の行為となっており、その行為を行った理由は「西洋人がやらないから」なのではないかと第三者が推測しているのである。つまり、「西洋人がやらない」ということも既知情報となっており、従属節と主節の表現内容は「P已然、Q已然」になっているが、従属節の「西洋人がやらない」ということが、主節の「自分もやらない」という行為の理由になっているかどうかは「のだろう」があるとおり、未確定である。

一方、日本語の原文に対する中国語の訳文は、原文の意味合いがよりの確に表現されて

いる。(36)の訳文には、従属節に推測・判断を表す副詞の“大概”が接続表現の前に置かれることによって、従属節が主節の行為の理由になっているか否かは未確定の段階であることが示されている。また文末に推量を表す「語気助詞」の“吧”も使用されており、一文の中で、複数の推測を表すマーカーが置かれているため、推測、判断の範囲は全文にわたっていると言える。また、焦点マーカーも複数となり、全文においては“是…的”だけではなく、主節に“才”も使用されており、焦点マーカーは三箇所にも置かれている。これらの焦点マーカーが使用されることによって、原因節が焦点化されているのが明らかになっている。

一文の中で、複数の推測を表すマーカーと複数の焦点を表すマーカーが置かれていることは、日本語との形式上の違いにすぎなく、意味上は等価になっている。(36)の原文と訳文の統語要素を図示すると【図12】のようになる。



【図12】原因節が推量・判断のフォーカスである場合の両言語の統語要素

この図によれば、等価的な意味合いを表している場合、形態に富んでいる日本語は、単なる「～から、～のだろう」という簡略な構文形式をとるのに対して、形態に乏しい中国語は構文が複雑であり、多様な構文要素の手助けを借りなければならないということもうかがえる。

4.6 まとめ

本章では、まず、因果関係を表す複文における焦点の分類と両言語のそれぞれの原因節焦点化の表現形式について述べた。そして、対訳上における両言語の原因節の焦点化の表現形式と焦点のマーカーの位置について考察し、統語的に検討を行った。さらに、原因節が疑問のフォーカスないし推量のフォーカスになる場合、両言語の焦点の表現形式や構文上の相違についても検証を試みた。

焦点の分類に関しては、両言語にはそれぞれ「無標焦点」と「有標焦点」の2種類がある。「無標焦点」の場合は、両言語とも文の情報が「旧→新」という順序になっているため、

焦点が自然に主節に置かれるということが共通点になっていると言える。原因節が焦点化される場合は、「有標焦点」となり、日本語には2種類の表現形式が見られる。焦点マーカ一の位置は固定されており、構文形式により焦点を表しているのが特徴である。これに対し、中国語表現では、焦点の表現形式は、語彙によるものが多く、焦点マーカ一は原因節に置かれるものと結果節に置かれるものがある。焦点マーカ一が使用される場合、その数はひとつに限定されない。一文の中で、原因節のみにマーカ一が置かれ、原因節を際立たせている場合もあれば、原因節、主節ともにマーカ一が置かれ、原因節のマーカ一が直接際立たせる作用を果たし、主節のマーカ一が間接的に作用して、原因節を取り立てている場合もある。場合によっては、一文の中で、“是……的”構文形式による原因節の焦点化と、語彙による原因節の焦点化の2種類の表現形式が含まれていることも観察される。

また、構文順序を変え、原因節それ自身に焦点が置かれる場合、両言語は意味的かつ構文的に、等価性がもっとも高いと言っても過言ではない。

さらに、過去の出来事発生の原因について問い、原因節が疑問のフォーカスとなる場合、日本語では文末に「のだ」を用いなければならないのに対して、中国語では複数の焦点マーカ一を使用する場合には、文焦点を表すマーカ一の“是……的”の“的”が必須な構文要素とされる。原因節が推量・判断のフォーカスとなる場合、焦点マーカ一の使用は単複両用であったりするが、“的”の使用は拘束されない。構文要素では焦点マーカ一が単複両用にかかわらず、推量・判断を表すマーカ一の使用にも同様の傾向が見られる。統語要素は日本語より多いとはいえ、意味的には両言語は等価性が高いと言える。

ここまでの対照分析結果を見ると、原因節の焦点化における両言語の対応の実態は、構文的にはずれが存在しているが、意味的な重なりが大きいということが分かる。また中国語は形態に拘らず、文を構成していく上で、様々な面で日本語よりバラエティに富んだ表現形式を使用できるのである。概して言えば、原因節を焦点化させる点においては、統語的な相違が見られるが、意味的には対応性が高いものだと認められる。本章で得られた結果をまとめると、【表 28】のようになる。

【表28】日中両言語の原因節における焦点化の対応

日本語			中国語		
焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マー カーの位置	焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マー カーの位置
Pから、Qのだ	従属節	主節	P, 才Q (語彙)	従属節	主節
Pので、Qのだ			正/是G P, Q (語彙)	従属節	従属節
Pために、Qのだ			正/是G P, G才Q (語彙)	従属節	従属節と主節
Pて、Qのだ			是G P, G才Q的 (語彙+構文形式)		
Q、Pからだ (構文順序変換)	従属節	従属節	G Q, 是G P (構文順序変換)	従属節	従属節

注1: Gは中国語の接続表現を示す。

注2: Pは従属節 (原因・理由) を表し、Qは主節 (結果・帰結) を表す。

注

第4章

- 1) 焦点の定義については、Halliday (1967: 199-244)、Rooth (1985)、田窪(1987: 42)、野田 (1997)、徐 (2001: 10-13)、今尾(1991: 81)を参照した。
- 2) 焦点の分類に関しては主に徐烈炯 (2001)、盛(2005)を参照した。
- 3) 「自然焦点」を「情報焦点」と呼ぶ説も多くある。
- 4) “才”の機能に関して、井田(2003: 201)は、文に内在する条件・目的・原因の論理関係を際立たせる役割を果たすと記述している。また、張(2000: 101)では「“才”的作用在于：一方面使句子内在的逻辑关系由隐而显；另一方面强调了关联组合的排他性。所谓强调排他性、实际上就是强调唯一性。（“才”の働きとして、ひとつは文の内的な論理関係を顕在化させることである。もうひとつは、相互の組み合わせの排他性を強調することである。排他性を強調するというと、つまり唯一性を強調するということである。）」と述べている。
- 5) 今尾 (1991:86) による。
- 6) 益岡 (1997: 121-127) 参照。
- 7) 蓮沼 (2001:124) による。
- 8) 于 (2000:PP.190-193)では「ので／から」の焦点の当て方について論じられている。
- 9) 郭 (2003:222)は “是…的” 構文では一つか二つ以上の成分が強調されている。強調された成分は文の焦点であり。スポットともいう。基本的に文のすべての成分が焦点になれるが、実際の運用においては主語や述語、目的語を強調するのではなく、主に述語の動作を具体的に説明する成分が焦点になる。つまり、動作の手段、方式、場所、時間、道具、対象、原因、状態、目的などを表す成分である。“是…的” 構文では一般的に強調したい部分を“是”と“的”の間におく。つまり、“是”と“的”でマークされるのであると述べている。
- 10) 袁 (2003:6) 参照。
- 11) 木村(2003: 304-305)は、「“的” 置于句尾、句子所叙述的全部内容表述的是一个新信息、以对一个已然事件发生的原因加以说明的句式。（“的” が文末に置かれる場合、文に述べるすべての内容が新情報だということを表す。すでに事実になっている事件の発生の原因について説明を加える形式である。）」と記述している。